

第3回ワークショップでは、新庁舎が完成した後の町民スペースの運営についてヒントを得るため、市民と行政が一緒になって創り上げ、運営されている施設として評価が高い「おにくる」の担当者にオンラインでご講演いただきました。

お話を聞いた人

山脇知郎 さん
(大阪府茨木市
市民文化部共創推進課)



茨木市の「おにくる」とは

どんな施設？

市民会館の閉館をきっかけに整備した文化ホール・こども支援センター・市民活動支援センター・図書館などをあわせ複合施設。世界的建築家の伊東豊雄氏による設計。茨木市の「共創の中心地」「実験場・見本市」として、市民が主催するイベントが年間700件以上実施され、グッドデザイン賞をはじめ、数々の受賞歴がある。

「おにくる」という施設名について

一般公募の際、市内に住む当時6歳の子どもが「こわい鬼さんも楽しくて来なくなっちゃうところ」ということで提案し、市民投票を経て決定した(市のキャラクターにもなっている「茨木童子」という鬼がもとになっている)。

施設の特徴

- ・7階建の各フロアに市の直営や民間の指定管理などを含めた8つの運営主体が同居
- ・館内の各機能が連携するように「おにくる会議」を組織し、管理職だけでなく現場の若手スタッフも含めた会議を月に1~2回行っている

大阪府茨木市

人口 285,902人 (R7.7月末時点)

面積 76.49km²

南部は大阪の中心部に近く、北部は豊かな山間部



おにくるができるまで

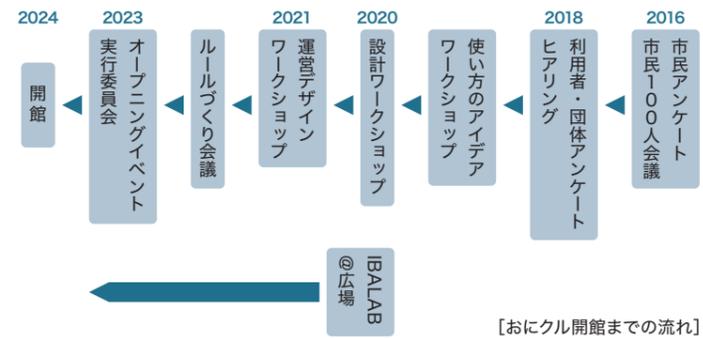
山脇さん：「おにくる」の開館まで、8年をかけて市民との対話を重ねながら準備しました。市民アンケートと市民100人会議(10人×10回)を行い、「時代に合わせて使い方が変わってもいいのでは」「使い方を市民に任せてみてはどうか」「さまざまな人が思い思いに過ごせる広場のような施設に」などのご意見をヒントに、「育てる広場」というキーコンセプトが生まれました。

山脇さん：それから、キーコンセプトの実現に向けて数々の取り組みを実施しましたが、中でもおにくるの源流と言えるIBALAB@広場(市民会館跡地に整備した暫定的な広場)では、社会実験としてイベントなどを実際にやってみながら、市民が広場を育てていきました。プログラム主催者が集まって情報交換や活用方法を検討する「ひろばかいぎ」も定期的に行い、ワイワイ楽しみながら意見交換。行政も市民からの「やってみたい」を禁止するのではなく、できることを増やす方向で話し合いと実践を重ねていきました。

山脇さん：ワークショップは8年で108回開催、延べ2,200人が参加しました。後半は、運営方法やルールづくりについてのワークショップも行い、開館までの準備をしていきましたが、「育てる広場」というキーコンセプトに沿って取り組むことで、市民のみさんの共感を得ながら進めることができました。参加者の中からオープニングイベントの

行委員会ができて、開館日には市民100人でのテーブルカットを行いました。建設中もずっと市民のみさんが活動を続けていたので、おにくるがオープンしてすぐに多彩な活動が行われるようになりました。

山脇さん：おにくるは間もなく開館2周年を迎えますが、今も「そんな使い方あるんだ!」「もっとこんな使い方できるな」という発見や展開が続いています。不確定要素が多いと困る場面もありますが、それを問題と捉えるのではなく、一緒に考えて変化させていくことにワクワク感や希望を感じています。加美町の新庁舎にできる町民スペースも、これからの街を考えるために大切な空間になるのではないのでしょうか。おにくるが正解というわけではないですが、管理運営側と利用者がパートナーとして進んでいければ、きっとよい空間ができると思います。



【おにくる開館までの流れ】

質疑応答

Q.市民のアイデアはどうやって集めている?

A.おにくるの企画は「IBALAB@広場」から出発している。参加者がつながり、顔を合わせ続けているとアイデアが生まれ続ける。「自由に使いたい=無条件で貸す」ではなく、みんなのための場所になるよう、行政は活動のコーディネートを行っている。

Q.「IBALAB」での企画も一般市民からの発案だった?

A.市民がつながることで、行政には出せないアイデアが出てくる。NGになりがちな焚き火なども、消防に届けるなど一緒にやり方は考えられる。おにくるの広場はコンクリート舗装部分を花火OKにし、夏は賑わっている。

Q.ワークショップでおにくるを中心に利用する人を育てたほかに、どんな発信、働きかけをした?

A.開館後に違う担当の課でも協働できるよう、市役所も「子育て×図書館」などを想定した連携事業に取り組み、開館に向けてムードづくりをした。1年半前からHPや広報誌で発信もした。

ワークショップチームより

大沼：茨木市と加美町は、街の規模は違ってもワークショップの熱量は負けていないと思います。新庁舎が、行政と町民のみさんで一緒に挑戦していける場の一つになれば良いと思いました。

千葉：新庁舎ができるまで、設計者としてもしっかり対話を続けていきたいです。新庁舎の共用スペースを使い倒していただけるように、さらに町民のみさんと横のつながりを作っていけたらと思います。

高橋：加美町としてもいろいろな部署が連携して活動したり、共用スペースが活気のあるものとなるようにしていきたいです。誰が来ても気持ちよくも過ごせるような役場を目指していきたいので、引き続きご意見・ご協力をお願いします。

